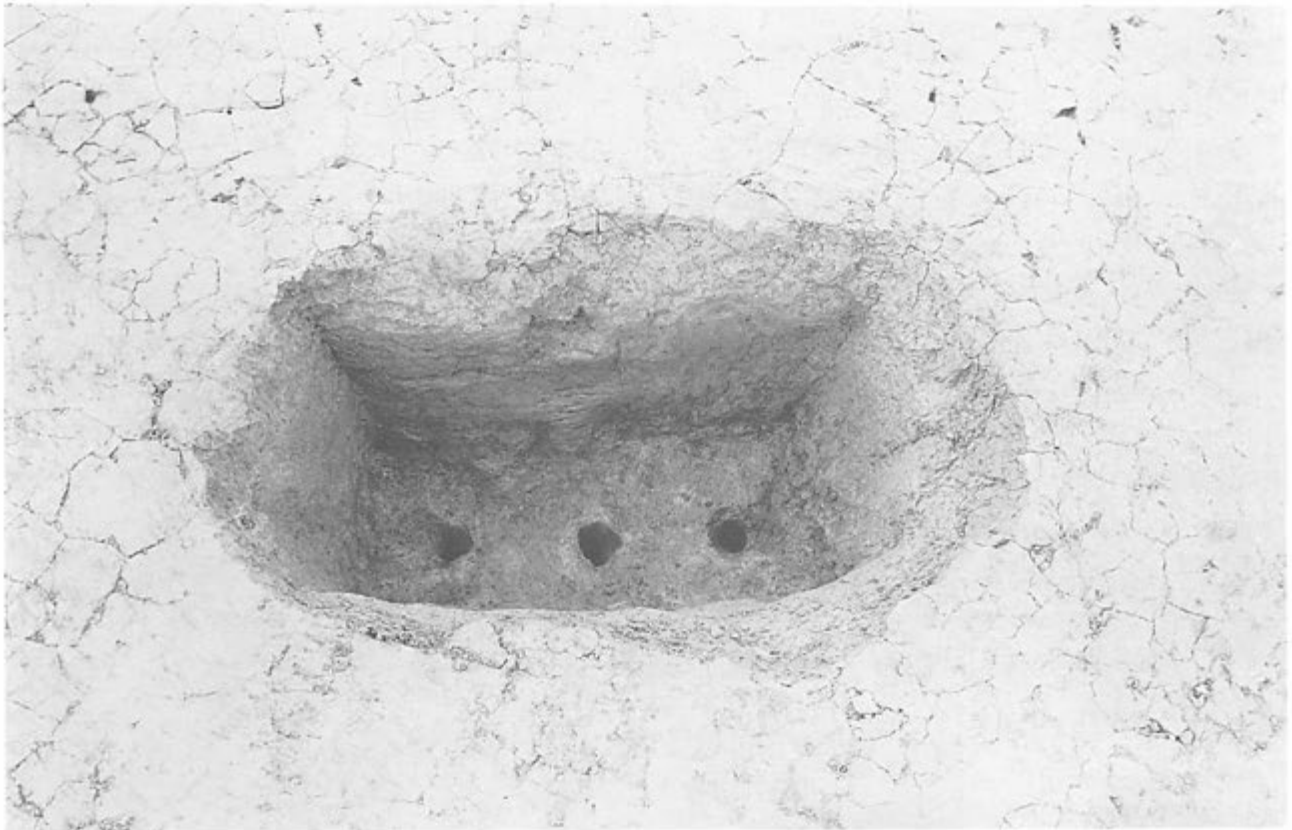




埋文だより

第4号

平成6年1月10日発行



旧石器時代の陥し穴（仁田尾遺跡）

旧石器時代の陥し穴発見

動物の狩猟方法には槍や弓矢を使用する方法、罠を掛ける方法などがあります。そうした方法の一つとして動物の習性を利用し、より安全性の高い陥し穴による方法があります。陥し穴は縄文時代に非常に発達した狩猟方法ですが、今回松元町仁田尾遺跡で縄文時代のものと同じ形態と底部施設をもつ旧石器時代末期（約1万2千年～3千年前）の陥し穴が6基みつかりました。長さが1.2～1.6m、幅が0.5～0.8mの

楕円形あるいは長方形の平面形をしており、深さは1.2～1.6mあります。底の方へ向かって幅が狭くなり、底面には杭（逆茂木）の跡が長軸へ2～4個あるタイプと、まっすぐ掘りこまれて底に小さい穴が多くみられるタイプがあります。

このような形態の陥し穴は縄文時代には全国で見られますが、今回の発見はそれらの中でも最古で、縄文時代のものとの関係などが注目されるようです。

ほ た て ば る 甫立原遺跡

《所在地：鹿児島県薩摩郡宮之城町》

甫立原遺跡は、県営農地開発事業（甫立原地区）に伴って遺物の散布地が発見され、平成3年度に宮之城町教育委員会によって遺跡の確認調査が行われました。確認調査の結果縄文時代早期の押型文土器を主体とする遺跡が存在することが判明しました。そして、協議の結果、遺跡が甫立原台地の最頂部に位置するため、記録保存の発掘調査を行うことになりました。

発掘調査は、平成5年7月から9月の3か月の間で行われました。遺跡は“甫立西瓜”で名高い畑作の一等地で、そのため鬼界アカホヤ火山灰層の中ほどまで削平を受けていました。遺跡の層序は、Ⅰ層＝耕作土、Ⅱ層＝アカホヤ火山灰層、Ⅲ層＝茶褐色土層の縄文早期遺物包含層で、それ以下はⅣ層＝黒褐色土層（無遺物層）からⅤ層＝二次シラス層へと続いています。

出土遺物はⅢ層に出土していますが、傾斜部分においてはⅡ層上部のアカホヤ火山灰の二次堆積層中にも若干確認されています。

遺物は、縄文時代早期中頃の押型文土器を中心に出土し、わずかに後期や晩期の土器もみられます。押型文土器は中部地方を中心に広く西日本に発見される土器ですが、この時期本県では貝殻文系の円筒土器が流行しており、これまでに押型文土器だけを単独で出土

する遺跡は確認されていませんので非常に注目されています。押型文土器は鉛筆程度の棒に山形や楕円の彫刻を施して、器面を回転させて文様を付けたものですが、棒に縄文を巻きつけて回転させた撚糸文も少量出土しています。口縁部が外反して底部は丸底に近いものと平底が出土していますので押型文土器の中頃のものと思われます。また、少量ですが押型文土器の終末期の同心円文の手向山式土器も出土しています。

発見された遺構は、縄文時代早期の押型文土器に伴う集石遺構2基があります。そのほかに、縄文後期～晩期と考えられる、陥し穴と考えられる遺構が4基発見されました。また、この遺跡は台地最頂部に位置するためか、縄文後期～晩期の風倒木の痕跡と考えられる地層横転が多数確認されています。



縄文早期の集石遺構（甫立原遺跡）

与論城跡^{グスク}

《所在地：鹿児島県大島郡与論町》

与論城跡は白い琉球石灰岩を使って築かれた石垣に囲まれた城です。その石垣は優美な曲線を描きながら、沖縄を指呼の間に望む標高94mの断崖上を廻っています。

この与論城跡は、琉球式城の北限として有名なだけでなく、石垣や各郭の残り具合も良好で、沖縄本島に残る他の琉球式城に勝るとも劣らない城跡です。

そして、この城は奄美諸島が島津支配以前には琉球王朝の支配下にあったことを現在まで伝えてきた大事な証人です。

さて、この城の各郭の地下にはどの程度当時の遺構が残っているかを今年度調査することになり、10月25日から11月2日まで確認調査が行われました。

その結果、掘立柱の柱穴や鍛冶滓のある炉穴などのいろいろな遺構が検出されました。

また、宋銭をはじめ、中国で作られた青磁や白磁などの陶磁器や奄美独自の土器等が大量

に出土しました。さらに興味深いことに、動物や魚の骨、貝殻等の食物の滓までも大量に出土したのです。

これらのことから、地上に残っている遺構とともに、地下にも大事な遺構・遺物がまだ眠っていることが確認できました。

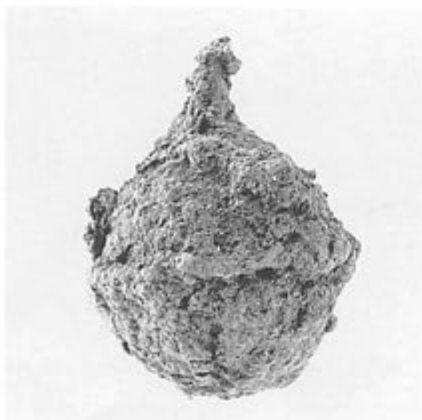
その他にも、側壁となる石垣を持った階段が断崖に築かれていることや、隣接した2つの井戸が断崖の下に残っていることも確認されました。

今後、与論城跡の調査の進展が楽しみです。



掘立柱建物 柱穴群

最新の出土品から(4)



X線レントゲン写真

中尾遺跡出土の鉄製鈴

鉄製の鈴出土

《中尾遺跡：肝属郡吾平町》

中尾遺跡は、県道神野折生野吾平線改良工事にともなって平成3年度と平成5年度に発掘調査が行われ、縄文時代早期および古墳時代の遺物・遺構が発見されました。

なかでも古墳時代の住居跡は17基も見つかり、その中からは土器のほかに鉄製の鎌や甌などが発見されています。また集落を囲むのではないかと思われる溝状の遺構も数本発見され、その中からは多量の土器とともに鉄製と考えられる鈴も発見されました。

今までにこのような大規模な集落跡は大隅半島では発見されておらず、大隅半島の古墳時

代の生活を考える上で中尾遺跡の出土遺物や遺構は貴重な資料となるものです。

出土した鈴は、直径4.3cmの球形をしたものです。出土時には錆が多く付着し、一見鉄のかたまりのようでした。そこで当センターのエックス線撮影装置を用いてレントゲン撮影を行ったところ、つまみの部分にあけた孔、中央部の帯や口の部分がはっきり観察され鈴と判明しました。今後はエックス線分析装置を用いてその材質等についても詳しく調べていく予定です。

弥生の世界を語る破鏡出土

《舞鶴城跡：国分市中央》

舞鶴城跡は、県立国分高校体育館建替えに伴い、平成5年6月～10月まで発掘調査が行われました。調査は第16代烏津義久によって築城された舞鶴城を主体にすすめられました。城跡の下層に中世の陶磁器とともに水田跡が発見され、さらにその下層に古墳時代の土器、そして最下層に弥生時代の土器片多数とともに竪穴住居跡1基・石包丁、そして破鏡が出土しました。破鏡は復元直径7cm位の青銅鏡で後漢時代の中国で作られた「方格T字鏡」と呼ばれるものです。保存状態は非常に良く、暗緑色に輝き、破砕された断面はきれいに研磨されています。また穴もあることから吊るして使用していたと考えられます。その性格は「権力分与の象徴」・「呪術具」・「装身具」

等の説があります。

このような破鏡の出土は、弥生時代終末期に国分平野を中心としたクニ的な集団が存在し、破鏡を分与される程の勢力を持ちその生産的背景として既に国分平野は開発されていた等、本県の弥生時代の様子を解明する上で貴重なものとなりました。



弥生時代終末期の破鏡

感動を乗せてタイムトラベル

～歴史のふるさと県民セミナー「古代を探る」～

生涯学習の観点に立って、県立埋蔵文化財センターでの講座を中心として、遺跡での発掘体験をもまじえながら、先人の残した埋蔵文化財に対する理解と認識を高め、郷土愛を培い、各地域での郷土史学習の推進を図る目的で本年度から始まった6回続きのセミナーです。5月8日(土)の第1回をかわきりに毎月1回第2土曜日の午後を主に行い、去る10月9日(土)で全ての日程が終わりました。

第1回目は県教育委員会から向山文化課長を迎えての開講式の後、「埋蔵文化財保護のしくみと鹿児島県の埋蔵文化財の特色」という講義から本格的にセミナーが始まり、緊張の中にも笑顔がこぼれていました。



セミナー受講風景

第2回目からは、「鹿児島県の埋蔵文化財」のテーマで、旧石器時代から時代別に本県の特色についての講義があり、真剣なまなざしを向けていました。その際、特製のクリアホルダーに毎回縦じ込んでいく両面カラーでラミネート加工の施された「遺構・遺物カード」が大いに役だっているようでした。

講義は、各時代を解明するための3つのキーワードを設定し、それをカードで説明すること

から講義が始まるといったスタイルをとったため、受講者にもなかなか好評でした。

さらに、第3回目は、セミナー受講者に児童・生徒とその保護者が加わって実施されました。当日は、台風の接近・通過で午前中のセンターでの原始体験(軽石の加工品製作)が出来ませんでしたが、松元町仁田尾遺跡では、発掘体験は初めての人がほとんどだったにもかかわらず、次から次へと遺物が出土し中にはとても貴重な石鏃(やじり)を掘り出す児童もいて、「もっと掘りたかったなあ。」という感想も多く聞かれました。

また、その日の体験をもとに「古代のイメージ」画を募集し、力作の中から優れた作品が11月1日からの文化財保護強調週間のポスターとして使われました。

第4回目は「8・6豪雨」のため中止になるなど、予期せぬことも起こりましたが、最終日に2回分を1回にまとめて講義を行った後、閉講式での大久保センター所長のお礼の挨拶で幕を閉じました。

課題も残されましたが、来年度はそれらを踏まえてより県民に身近な、よりよい内容に充実させていきたいと思っています。



発掘体験—仁田尾遺跡(松元町)—

拓本・実測・トレース

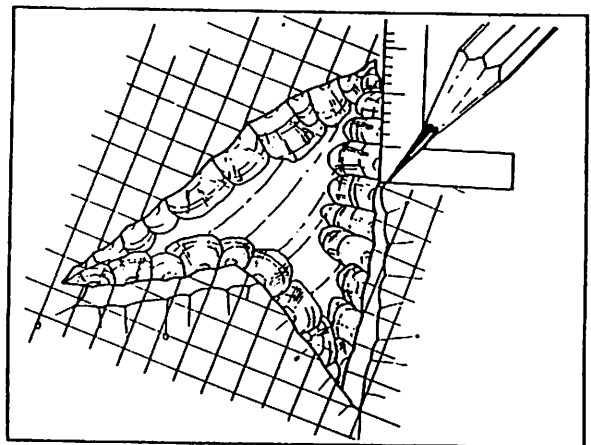
拓本

土器の文様などを表現する場合に用いる方法で、画仙紙と呼ばれる高級和紙を土器の表面に密着させ、拓墨をつけたタンポで上から軽く叩くことで文様を写し取るものです。土器など拓本をとりたい遺物の表面をきれいにし、遺物より大きく切った画仙紙を当てます。その上から水を含ませた脱脂綿などで画仙紙が土器の表面に密着するように押さえていきます。次に乾いた脱脂綿などで余分な水分を吸い取るように、また完全に密着するように押さえていきますが、この時空気が中に残らないように注意します。画仙紙が白くなって半乾燥状態になったら、タンポに墨をつけ、画仙紙の上から軽く叩きながら文様を写し取ります。打ち終わったらはがして、遺物の番号などを記入したあと雑誌などに挟んでおもしろをかけ、完全に乾かします。土器の文様の実測に拓本を用いると、複雑な文様表現なども簡単にあらわすことができ、写真では表現することのできないようなところまで表現することができます。

実測

住居跡等の遺構は発掘現場でその状況が実測されますが、掘り出された遺物等は持ち帰ってから1つ1つの形状や特徴などが正確に図化・記録されます。遺物実測は写真とは違い、あるがままの全てを表現するのではなく観察される資料から得られる情報を客観的に表現することが大切です。発掘現場から出土する資料には無数の種類がありますから、資料の特徴に応じた作図を行わなければなりません。基本的には、三次元にある物体を正面から垂直面に投影した立面図と、上から平面に投影した平面

図により、二次元に表現するもので、資料の特徴により側面図や断面図を加えるものもあります。実測は、ディバイダーやコンパス、三角定規や直定規などを使って、主に方眼紙に書き込んでいきますが、微妙なカーブを持った土器の表面などはマーコと呼ばれる特殊な型取器を利用します。また土器の実測図には断面を入れ、厚さを計るのにディバイダーやノギスを利用します。その他に出来上がった形状の実測図の中に整形痕や文様、使用痕など正確に実測していかなければなりません。



トレース

このようにして出来上がった実測図は、原図のままでは報告書に掲載できないためトレースをします。実測図の上にトレッシングペーパーをかけ、四隅をテープで固定した後、いろいろな太さのロットリング等を使ってトレースをします。これをケント紙等にレイアウトして貼り、上面にトレッシングペーパーをかぶせ、この上に遺物の番号や縮小の指定などを書き込みます。これで報告書に掲載できる図面が完成します。

旧石器時代

埋蔵文化財センターの1階、正面玄関から続くフロアの多くは学習展示室として使われています。ここでは、その中のいわゆる常設展示の旧石器時代のコーナーについて紹介したいと思います。

旧石器時代は大きく3つの時期に分けて展示してありますが、ここでは旧石器時代から縄文時代へうつり変わる時期として土器の出現期、いわゆる縄文時代草創期の展示も含めて紹介したいと思います。

①ナイフ形石器文化（A T以前）

今から約2万2千年前に鹿児島湾の湾奥、始良カルデラからの噴出物（A Tと呼ばれる）よりも下の地層から出土する遺物があります。ここでは出水市上場遺跡の第Ⅵ層から出土した石器群がそれにあたり、ナイフ形石器や台形石器などが展示してあります。

上場遺跡は1965年、故池水寛治氏によって発見され、以来5回にわたって発掘調査が行われました。その結果、旧石器時代の古い段階から新しい時期までの7つの異なる時期の石器群があることが明らかにされました。また、2基の竪穴住居跡も発見されています。

②ナイフ形石器文化（A T以後）

始良カルデラの噴出物よりも上位で出土する遺物をもつ文化で、ここでは鹿屋市西丸尾遺跡や指宿市小牧3 A遺跡の資料を中心にナイフ形石器・台形石器・剥片尖頭器・三稜尖頭器・グレイバー・スクレイパーなどが展示してあります。また、西丸尾遺跡の石核の接合資料は、石器製作の一端を探れる貴重な資料です。

③細石器文化

旧石器時代の末期には、薄く剥ぎ取った石片

を組み合わせる用いる細石器の文化が見られます。この時期の遺跡は鹿児島県でも多く発見されています。ここでは、細石刃と細石核との組み合わせが目をつけます。三船産黒曜石・上牛鼻産黒曜石・水晶・凝灰質頁岩・頁岩・砂岩・凝灰岩など、石材ごとの細石器の組み合わせが展示してあります。

また、壁には細石器の使用復元例も展示してあります。



西丸尾遺跡（鹿屋市）の旧石器時代発掘風景

④旧石器時代から縄文時代へ

—縄文時代草創期—

旧石器時代の終末期は氷河期の終わるころにあたり、植物相・動物相にも大きな変化があったと考えられています。この新しい環境に適応するかのように土器や石鏃などの新しい道具が使われるようになりました。最近ではこの時期の資料も増え、少しずつ当時の様子がわかるようになってきています。

ここでは、鹿児島市加治屋園遺跡から出土した隆帯文土器や同市加栗山遺跡出土の石鏃や大形台形石器などが展示してあります。

これらは今から約1万1千年前に桜島付近から噴出したと考えられる薩摩火山灰の下層から出土したもので注目されます。

主なできごと

◎埋蔵文化財長期研修講座

平成5年度受講者7名(喜入町, 松元町, 入来町, 出水市, 福山町, 東串良町, 高山町)

6月1日に始まった6か月間の研修講座も全て終了し, 11月30日に閉講式が行われました。

◎埋蔵文化財行政基礎講座

埋蔵文化財行政に関する講座(開発関係者も対象)

・6月23日(木), 24日(木) 受講者146名

◎埋蔵文化財技術研修講座(第1回)

市町村の埋蔵文化財専門職員の研修

・10月5日(火)~7日(木) 受講者22名

これからの予定

◎埋蔵文化財技術研修講座(第2回)

・3月17日(木), 18日(金)

見学に来られませんか!

これからの発掘調査

当センターでは, 3月末までの予定で下記の遺跡を調査しています。見学を希望される方はお問い合わせください。なお, 特に団体で見学される時は, 事前に各調査事務所に連絡してからお越し下さい。

◎上野原遺跡(国分市上之段上野原テクノパーク内) 事務所: 0995-47-5652

・縄文時代早期の土偶(西日本で最古級のもの)や, 耳栓, 環状石斧等の遺物が出土しています。また, 蒸し焼き調理の跡と思われる集石や陥し穴状の遺構等も発見されています。

◎仁田尾遺跡(松元町仁田尾)

事務所: 0992-78-1204

・巻頭でも取り上げていますが, 旧石器時代の陥し穴(日本最古)が発見されました。他にも, 旧石器時代や縄文時代早期の土器や石器が多数出土しています。

【Contents】

Pitfalls in Paleolithic were found.
The site under excavation. (Part4)
-Hotatebaru Site-
-Yoron-Gusuku Site-
Artifacts most recently unearthed. (Part4)
-A bell made of iron-
-"Hakyo" talking about the Yayoi period-
Travel to the past with emotion.
-A history seminar for prefectural citizens.
[Research into our ancient past] -
Arrangement of artifacts. (Part3)
-Ink impression・Detailed drawing・Tracing-

From the exhibition room.
-Paleolithic-
Highlights in the Institute.
Our schedule.
Won't you visit here?
-Our excavation schedule-

埋文だより 第4号

鹿児島県立埋蔵文化財センター

〒899-56

鹿児島県始良郡始良町平松6252

TEL 0995(65)8787

FAX 0995(65)8117